Fact Sheet

阪東 美智子

―― 人の暮らしの基盤としての住まい・住宅問題を考える ①

私が所属する国立保健医療科学院は、厚生労働省が所管する国立の研究・研修機関であり、保健・医療・福祉に関係する自治体職員等に対する教育訓練と、それらに関連する調査・研究等を行っている。建築分野を専門としながら、国土交通省ではなく厚生労働省の研究機関にいることは、私にとっては大きな意味を持っている。それは、私の興味の対象が「建築物」そのものではなくそこで生活する「人」にあるからだ。

私の主たる研究テーマは、社会的に配慮を必要とする人々の居住問題である。具体的には、身体障がい児・者や高齢者の住宅や暮らしの改善に関する研究、生活保護被保護者やホームレスの人々の居住保障・居住支援に関する研究、DV・暴力被害女性の支援のための施設環境整備に関する研究などに取り組んでいる。「人」の中でも特に、障がい者や高齢者、低所得者、暴力被害者など、社会的配慮を必要とする人々は、健康な生活を営むうえで様々な課題を抱えており、これらの人々にとって「住まい」はとりわけ重要な意味を持つ。「住まい」がなく公園や河川で起居しているホームレスの人々の中には、冬場の寒さや台風などの災害、あるいは暴漢の脅威に脅かされ、病気や死に直面している者が少なくない。DV・暴力被害者の中には、暴力から避難して生活できる「住まい」がないために、やむなく加害者のもとにとどまっている者もいる。障がいのある人や高齢者の中には、心身の状態と「住まい」の性能が合わないために、自分の思い通りの生活ができない人もいる。これらの人々に対して適切な「住まい」を提供することは、健全な日常生活の営みや社会参加を行うことを可能にし、健康な暮らしを回復することにつながる。そのための方策を模索し提示することが、私の研究の目的である。

そもそも研究者になりたいと思っていたわけではなかった。研究職として社会人デビューしたのは30歳を超えてからになる。大学院の博士課程を修めたからということもあるが、高校生の時に海外留学をしたり、修士課程修了後に青年海外協力隊に参加したり、阪神淡路大震災を経験したり、紆余曲折しながら現在に至っている。私の人生の節目はどこにあったのか、簡単に振り返ってみたい。

（裏面に続く）

Fact Sheet

阪東 美智子

―― 人の暮らしの基盤としての住まい・住宅問題を考える ①

小さいころから共働きの家庭に育ち、母から「何か手に職を持つことが大事」と聞かされてきたことの影響があって、とにかく専門的な知識・技術が学べ資格がとれるもの、という漠然とした進路のイメージがあった。子どものころから読書が好きで、ナイチンゲールやシュバイツァーの伝記物語を読んで多少の憧れを感じ医学の道に進みたいと思ったこともあったが、そのために努力をするというわけではなかった。しかし勉強は嫌いではなかったので、中学受験をして中高一貫の進学校に通うことになり、毎日片道約1時間をかけて通学した。おかげで地元での友達関係が薄れ、成人式では一緒に祝う同級生もおらずやや寂しい思いもしたが、結果的には生徒の主体性を重んじた中高一貫教育の中で育ったことが、現在の私の基礎を形成したとも思える。私が通った学校は教育大学の附属校であり「実験校」と呼ばれていたこともあって、教員も授業も行事も非常にユニークだった。当時はよくわかっていなかったが、今思えば研究者まがいの教員が多かったように思う。教科書通りに授業が進まず、教員の興味の範囲で密度の濃い話が展開されることが多く、歴史などは結局修了年限までに近現代まで届かなかった。生徒主体の授業も多く、課題を与えられ個人やグループで研究する機会も少なくなかったように思う。特に高校の自治会行事は、企画・運営とも生徒に一任されており、この経験を通してプロジェクトや研究の企画・運営の基礎力を学んだ気がする。

高校2年の夏から1年間、AFS（アメリカンフィールドサービス）の交換留学生として、カナダでホームステイを経験した。留学を決心したのは、海外の暮らしに興味があったことはもちろんだが、このまま大学受験の準備だけで高校生活を終わらせたくないという思いがあった。実際は受験勉強からの逃避にほかならないのだが。当時、クラスで予備校に通っていなかったのは私と他数名しかいない状況であったのだが、学校以外に当たり前のように予備校に通う級友たちを見ながら、その波にどうしても乗れなかった。ただ一応私にも計算があって、留学によって英語力を高めたいと考え、希望の渡航先にはアメリカ・イギリス・カナダを記入していたのだが、まさかカナダの中でも唯一のフランス語圏であるケベック州に決まるとは思いもよらなかった。フランス語に関する知識はなく、事前に準備も全くせずに渡航したのだが、ホームステイ先に恵まれ、ホストファミリーの厚意と支援のおかげで、あまり不自由を感じずに過ごすことができた。留学先ではセカンダリースクールの5年（最終学年）に編入し、フランス語で行われる授業も何とかこなした。数学は言葉がわからなくても大体何とかなるのだが、歴史の授業も履修できたのは我ながらすごいと思う。残念ながら向こうの国語であるフランス語の授業は単位を落とし、修了証書を手にすることはできなかったのだが。留学中に印象に残っていることの一つは、セカンダリースクールの同級生たちが、早くから具体的に将来の職業を決めていて、それに向けて着実に準備をしていたことである。日本では、当時はまだ共通一次試験と呼ばれていたが、その試験対策自体が目的化していて、その先にある将来の職業の話をすることがほとんどなかったので、非常に刺激を受けたのを覚えている。

（国立保健医療科学院生活環境研究部主任研究官　阪東美智子）

Fact Sheet

阪東 美智子
―― 人の暮らしの基盤としての住まい・住宅問題を考える ②

帰国後は高校2年に復学し、留学前の同級生より1年遅れて高校を卒業した。おかげで、大学受験の際にはなるべく現役合格できるところを選ぶことになってしまった。カナダの級友からあれほど刺激を受けたにもかかわらず、共通一次試験の結果と、「なるべく手に職を」という母の言葉と、同級生の進路選択にもいくらか影響を受けて、何となく建築の分野に進んだ。大学に入学してからも、建築家になりたいという信念があったわけではなかった。もちろん学生時代は自分の趣向を凝らしたデザインを図面に描くのは嫌いではなかったが、図面台に向かうよりも外に出歩いて人と直接的に関わりながら社会的な活動を行いたいという気持ちがどこかにあった。大学で学ぶうちに、建築という分野は、設計だけではなく、修復や保全、構造、環境工学、都市計画など幅広い領域を含み、自然科学的側面もあるが社会科学や人文科学的側面も持っていることがわかってきた。そうした中、卒業論文のテーマとして選んだのが、当時社会問題化し始めていた「外国人労働者の居住問題」だった。研究する限りは社会的問題を含み社会に貢献できるテーマに取り組みたいという気持ちがあった。当時私が所属していたゼミはその年開かれたばかりで先輩は一人もおらず、担当の先生も学生の主体性に任せる人だったので、研究テーマだけでなくその枠組みや方法などすべて自分ひとりで企画し実践しなければならなかった。初めて本格的な研究に取り組む私にとってその苦労は大変だったが、一方で研究の面白さも実感することになった。さて実際に研究を始めてみると、東京に比べ関西ではまだ外国人労働者の流入は少なく、右往左往の結果行き着いたところが、大阪市西成区あいりん地区だった。ここは日雇い労働者が集積する日本最大の寄せ場で、当時は約2万人の日雇い労働者が簡易宿泊所で寝泊まりしていた。外国人労働者を支援するボランティア団体がこの地で活動をしていて、調査に通う中で、外国人労働者ではなく日本人にも日雇い労働やホームレスの問題があるということを知ることになった。このことがきっかけで、以来今日に至るまで20年以上にわたって、ホームレス問題は私の研究の柱の一つになっている。

大学を卒業した当時はバブルがはじける直前で就職活動も売り手市場だった。建築系の学生のうち約1割が女性だったが、就職の苦労はほとんどない時代だった。だが高校時代の悪癖がぶり返し、大学院の修士課程に進学・修了後、就職活動から逃避するようにすぐに青年海外協力隊に参加した。渡航先にアフリカの内陸国であるザンビア共和国を選んだのは、子どもの頃に読んだシュバイツァーの伝記の影響があったのかもしれない。また卒業論文と修士論文で通ったあいりん地区の光景も、発展途上国での活動を志した根底にあったのかもしれない。ザンビアでは大学の講師として建築製図を教える傍ら、スクウォッター地区の調査を学生と一緒に行った。大学の授業では、雑誌の記事などを用いて自国の環境問題などについて議論してもらうなど、できるだけ自分の足元の問題を見つめてもらうよう工夫した。

（裏面に続く）

Fact Sheet

阪東 美智子

―― 人の暮らしの基盤としての住まい・住宅問題を考える ②

ザンビアから帰国後、大学院の博士課程に復学したが、翌年、阪神淡路大震災で被災した。大学が神戸にあったことから震災研究にも関与することになったが、自分自身が被災者であり研究者であるという立場にあってその仕切りがうまくできず、しばらく研究から遠ざかったこともあった。その後、大学院在学中に結婚し、兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所に就職した。この研究所は、リハビリテーションセンターの中に立地し、主に下肢に障がいのある人々の日常生活や社会参加を支援することを目的としている。ここでの3年半では、医療・機械・土木・電気・電子・制御などさまざまな分野の研究者・実務者と連携し、時には障がいのある人々と一緒に実験を行いながら、障がいに関する知識や社会福祉の制度などを学ぶ機会を得ることができた。任期付の研究職だったことから、その後現在の職場の前身である国立公衆衛生院に転職し、現職に至っている。

さまざまな節目はあったが、若い頃の2回の海外生活、特に高校時代に親から離れて異国で生活したことは、自信を生み見聞を広げ自己のアイデンティティの形成に大きな影響があった。ぜひ海外に行くチャンスがある人は、それを実行に移してもらいたい。また、さまざまな経験の中に、今を形作るものが存在している。自分の進む道が決まっている人もそうでない人も、とにかくいろいろなことにチャレンジしてほしい。多少遠回りになるかもしれないが、その経験がこれからの人生にきっと役立つはずである。

略歴

年代	
1966年	大阪府に生まれる
1986年	大阪教育大学附属天王寺高等学校卒業 在学中に1年間、AFS交換留学生として、カナダ・ケベック州に留学
1990年	神戸大学工学部環境計画学科卒業
1992年	神戸大学大学院自然科学研究科環境科学専攻（修士課程）修了 青年海外協力隊に参加 ザンビア共和国に派遣され、ザンビア国立コッパーベルト大学環境学部講師として1994年9月まで活動
1994年	神戸大学大学院自然科学研究科環境科学専攻（博士課程）復学
1998年	兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所特別研究員
1999年	神戸大学大学院自然科学研究科環境科学専攻（博士課程）修了、博士（工学）授与
2001年	国立公衆衛生院建築衛生学部研究員
2002年	国立保健医療科学院建築衛生部研究員 同主任研究官を経て、2011年の組織再編に伴い生活環境研究部主任研究官として現職に至る

（国立保健医療科学院生活環境研究部主任研究官　阪東美智子）